

ルカの福音書 51 回

70 人の帰還

ルカ 10 : 13～24

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスのガリラヤ地方での奉仕（ルカ 4 : 14～9 : 50）

②ルカ 9 : 51 からエルサレムへの旅が始まった（ルカ 9 : 51～19 : 27）。

＊ルカは、エルサレム途上におけるイエスの奉仕を記録している。

＊ルカは、旅の行程や地理的情報に関しては、さほど注意を払っていない。

＊ルカは、弟子たちに語られたイエスの教えに関心がある。

＊エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

(2) 直近の文脈

①ガリラヤでの最初のミッションは、12 使徒の派遣であった（9 : 1～6、10）。

②2 番目のミッションは、70 人の派遣である（ルカだけの情報）。

③ルカの意図は、宣教の広がりを書き記すことにある（使徒の働きにつながる）。

④ルカの強調点は、70 人の宣教活動そのものではなく、イエスの教えである。

⑤この箇所では、派遣された 70 人が帰還する。

2. アウトライン

(1) 悔い改めない町々（13～16 節）

(2) 70 人の帰還（17～20 節）

(3) イエスの喜び（21～24 節）

3. 結論

(1) 忠実な奉仕に伴う喜び

(2) サタンの敗北に伴う喜び

70 人の帰還について学ぶ。

I. 悔い改めない町々（13～16 節）

1. 13～14 節

Luk 10:13 ああ、コラジン。ああ、ベツサイダ。おまえたちの間で行われた力あるわざが、ツロとシドンで行われていたら、彼らはとうの昔に粗布をまとひ、灰をかぶって座り、悔い改めていたことだろう。

Luk 10:14 しかし、さばきのときには、ツロとシドンのほうが、おまえたちよりもさばきに
耐えやすいのだ。

- (1) この叱責は、70 人を派遣する前に語られたものである。
 - ①目的は、弟子たちを励ますことにある。
 - ②弟子たちの宣教活動がいかに重要であることを教えている。
- (2) ガリラヤ湖の北の 2 つの村と、死海の南の 2 つの町が対比される。
 - ①ガリラヤ湖の北にある 2 つの村とは、コラジンとベツサイダである。
 - ②死海の南にある 2 つの町とは、ソドムとゴモラである。
 - ③これは、「inclusio」（包含）という文学手法である。
 - ④これは、イスラエルの地にあるすべての不信仰な町や村に対する叱責である。
 - ⑤コラジンとベツサイダは、その代表格である。
 - ⑥コラジンとベツサイダは、イエスの数々の奇跡を目撃した。
- (2) ツロとシドンは、地中海沿いのフェニキア人の町々である。
 - ①旧約時代において、神とイスラエルに敵対したために厳しい裁きに遭った。
 - ②もし彼らが同じ奇跡を目撃していたなら、彼らは悔い改めたことであろう。
 - ③それゆえ、裁きのときには、ツロとシドンのほうが裁きに耐えやすい。
*ルカの読者（異邦人）には、励みとなるメッセージである。

2. 15 節

Luk 10:15 カペナウム、おまえが天に上げられることがあるだろうか。よみにまで落とされるのだ。

- (1) 次に、カペナウムが取り上げられる。
 - ①カペナウムは、イエスのガリラヤ伝道の拠点であった。
 - ②カペナウムは、ナザレよりも心が開かれていた。
 - ③しかし、数々の奇跡を目撃した割には、イエスに対する信仰を持たなかった。
 - ④カペナウムの運命が予告される。
*天とよみ（ハデス）が対比されている。
*天は祝福の場、よみは辱めの場である。

3. 16 節

Luk 10:16 あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのです。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒むのです。」

- (1) 70 人のメッセージを拒否することは、イエスを拒否することである。

- ①そして、イエスを拒む者は、イエスを遣わした父なる神を拒むのである。
- ②イエスは、弟子たちの働きの重要性を強調し、弟子たちは、それを理解した。
- ③彼らは、イエスの代理人として派遣される。
- ④箴 25 : 13

Pro 25:13 忠実な使者は、これを遣わす者にとって、／刈り入れ時の冷たい雪のよう。／その人は主人の心を生き返らせる。

- ⑤ヨハ 3 : 34

Joh 3:34 神が遣わした方は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになるからである。

- ⑥聖書を字義どおりに解釈する理由は、忠実な弟子になるためである。

(2) これで、派遣に際してのイエスの教えが終わった。

- ①70 人の弟子たちの活動内容は、省略されている。
- ②すぐに 70 人の帰還の記事に移る。

II. 70 人の帰還（17～20 節）

1. 17 節

Luk 10:17 さて、七十二人が喜んで帰って来て言った。「主よ。あなたの御名を用いると、悪霊どもでさえ私たちに服従します。」

- (1) 70 人の報告は、喜びに満ちていた。
 - ①忠実な奉仕に、超自然的な力が伴ったからである。
 - ②特に顕著だったのは、悪霊の追い出しである。
 - ③イエスは、ことばを発することによって悪霊を追い出された。
 - ④弟子たちは、イエスの御名によって悪霊を追い出した。
 - ⑤彼らは、イエスの権威を用いたのである。

2. 18 節

Luk 10:18 イエスは彼らに言われた。「サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました。」

- (1) 悪霊どもが服従することは、サタン敗北の手付金（前兆）のようなものである。
 - ①この瞬間にサタンが天から落ちたということではない。
 - ②イエスのことばは、預言的なものである。
 - ③サタンは、患難期に天から落ちる（黙 12 : 7～10）。

3. 19 節

Luk 10:19 確かにわたしはあなたがたに、蛇やサソリを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けました。ですから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。

(1) 「蛇やサソリ」は、字義どおりにも、比喩的にも、解釈が可能である。

- ①ここでは、弟子たちの肉体的守りと霊的守りが約束された。
- ②この約束は、このミッションに限定されたものであろう。
- ③復活後に、イエスは同様の約束を与えた。
- ④マコ 16 : 17～18

Mar 16:17 信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばで語り、

Mar 16:18 その手で蛇をつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば癒やされます。」

- ⑤復活後の約束も、一時的なものであった。
- ⑥ステパノの死（使 7 : 60）やヤコブの死（使 12 : 2）が、それを証明している。

4. 20 節

Luk 10:20 しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

(1) イエスは、正しい喜び方について教えた。

- ①「AではなくB」という形式の教えである。

(2) 悪霊どもが服従することを喜んではならない。

- ①イエスが弟子たちに「喜んではならない」と告げたのは、ここだけである。
- ②奉仕の成功には常に危険性が伴う。
- ③傲慢や勝利主義の危険性がある。
- ④奉仕の成功は、主イエスの成功である。

(3) むしろ、自分たちの名が天に書き記されていることを喜ぶべきである。

- ①恵みによって救われていることを喜ぶ。
- ②神に対して膨大な負債を負っていることを認識したなら、謙遜にさせられる。

Ⅲ. イエスの喜び (21～24 節)

1. 21 節

Luk 10:21 ちょうどそのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ、これはみこころにかなった

ことでした。

- (1) ここでも、喜びのテーマが続く。
 - ①イエスは、父なる神に向かって喜びの祈りを献げた。
- (2) 喜びの理由
 - ①これらのことを幼子たちに現わしてくださった。
 - *霊的真理
 - *メシアの到来と神の国が近づいたということ
 - *サタンの敗北
 - ②幼子たちとは、弟子たちのことである。
 - ③知恵ある者や賢い者には隠した。
 - ④これは、御心に適ったことである。

2. 22 節

Luk 10:22 すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。子がだれであるかは、父のほかはだれも知りません。また父がだれであるかは、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかは、だれも知りません。」

- (1) これもまた祈りの一部分である。
 - ①と同時に、弟子たちを励ますことばでもある。
- (2) 父なる神と子なる神の親密な関係が啓示される。
 - ①父なる神は、被造世界のすべてをイエスに渡された。
 - ②子が誰であるかは、父のほかには誰も知らない。
 - *受肉の神秘は、父なる神だけが知っておられる。
 - ③父が誰であるかは、子のほかには誰も知らない。
 - *子だけが、父を啓示することができる。
 - *子は、自分が選んだ人たちに父を啓示する。

- (3) イエスは、神と人との唯一の仲介者である。

①1 テモ 2 : 5

1Ti 2:5 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。

3. 23 節

Luk 10:23 それからイエスは、弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたが

たが見ているものを見る目は幸いです。

(1) ここから弟子たちへの語りかけに戻る。

①イエスは、弟子たちを祝福された。

②弟子たちが経験している祝福は、不信仰な人たちが受ける裁きとは対照的。

4. 24 節

Luk 10:24 あなたがたに言います。多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たいと願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願ったのに、聞けませんでした。」

(1) 旧約時代の預言者や王たちは、メシアの到来を待ち望んでいた。

①しかし彼らは、その成就を見ることができなかった。

(2) それに対して、イエスの弟子たちは、旧約聖書の預言の成就を見ている。

①メシアが到来し、神の国が近づいた。

結論

1. 忠実な奉仕に伴う喜び

(1) この箇所のキーワードは、「喜び」である。

(2) ルカは度々喜びに言及している。

①ルカ 1 : 14

Luk 1:14 その子はあなたにとって、あふれるばかりの喜びとなり、多くの人もその誕生を喜びます。

②ルカ 1 : 46~47

Luk 1:46 マリアは言った。／「私のたましいは主をあがめ、

Luk 1:47 私の霊は私の救い主である神をたたえます。

③ルカ 24 : 52~53

Luk 24:52 彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰り、

Luk 24:53 いつも宮にいて神をほめたたえていた。

(3) 派遣前の教えを見ると、弟子の奉仕は苦難の連続であるかのように思える。

(4) しかし 70 人は、喜んで帰って来た。

①苦難がなかったわけではないが、それ以上の喜びが与えられた。

②イエスの弟子として大宣教命令のために労することは、特権である。

(ILL) 忠実に労した後の満足感

(5) ロマ 8 : 18

Rom 8:18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りない私

は考えます。

2. サタンの敗北に伴う喜び

(1) 黙 12 : 7~9 (患難期の中間)

Rev 12:7 さて、天に戦いが起こって、ミカエルとその御使いたちは竜と戦った。竜とその使いたちも戦ったが、

Rev 12:8 勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。

Rev 12:9 こうして、その大きな竜、すなわち、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者、全世界を惑わす者が地に投げ落とされた。また、彼の使いたちも彼とともに投げ落とされた。

(2) 黙 12 : 13 (患難期の後半)

Rev 12:13 竜は、自分が地へ投げ落とされたのを知ると、男の子を産んだ女を追いかけた。

(3) 黙 20 : 2~3 (再臨の後)

Rev 20:2 彼は、竜、すなわち、悪魔でありサタンである古い蛇を捕らえて、これを千年の間縛り、

Rev 20:3 千年が終わるまで、これ以上諸国の民を惑わすことのないように、底知れぬ所に投げ込んで鍵をかけ、その上に封印をした。その後、竜はしばらくの間、解き放たれることになる。

(4) 黙 20 : 10 (千年王国の後)

Rev 20:10 彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。

(5) サタンは、聖書の修正主義者である。

①創 3 : 1

Gen 3:1 さて蛇は、神である【主】が造られた野の生き物のうちで、ほかのどれよりも賢かった。蛇は女に言った。「園の木のどれからも食べてはならないと、神は本当に言われたのですか。」

ルカの福音書 52 回
良きサマリア人のたとえ
ルカ 10 : 25～37

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスのガリラヤ地方での奉仕（ルカ 4 : 14～9 : 50）

②ルカ 9 : 51 からエルサレムへの旅が始まった（ルカ 9 : 51～19 : 27）。

＊ルカは、弟子たちに語られたイエスの教えに関心がある。

＊エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

(2) 直近の文脈

①2 番目のミッションは、70 人の派遣である（ルカだけの情報）。

②ルカの強調点は、70 人の宣教活動そのものではなく、イエスの教えである。

③派遣された 70 人が帰還した。

④イエスは、弟子としての生活に関する教えを語る。

(3) ルカ 10 : 25～11 : 13 は 1 つのブロックである。

①ルカ独特の記録になっている。

②キーワードは「関係」である。

＊隣人との関係－良きサマリア人のたとえ（10 : 25～37）

＊イエスとの関係－マルタとマリア（10 : 38～42）

＊父なる神との関係－主の祈り（11 : 1～13）

2. アウトライン

(1) 律法の専門家とイエスの対話（25～29 節）

(2) 良きサマリア人のたとえ（30～37 節）

3. 結論

(1) 行いのない信仰

(2) 隣人愛の実践

(3) 「良きサマリア人のたとえ」が持つエネルギー

隣人との関係について学ぶ。

I. 律法の専門家とイエスの対話（25～29 節）

1. 25 節

Luk 10:25 さて、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試みようとして言った。「先生。何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」

- (1) ある律法の専門家が、イエスに質問した。
 - ①彼は、律法学者である。
 - ②動機は、イエスを試みることであった。可能なら罠にかけたいと思った。
 - ③彼は、知識はあるが、傲慢で霊的真理が見えていない人である。
 - ④この質問が、良きサマリア人のたとえが語られる機会となった。
- (2) 「先生。何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか」
 - ①彼は、イエスを教師、あるいは、ラビと見た。
 - ②彼は、イエスを預言者以下、メシア以下の存在と見た。
 - ③彼の質問は、当時のユダヤ教の考え方を反映したものである。
 - ④「何をしたら」に強調点がある。
 - ⑤「永遠のいのち」とは、メシア的王国への入国を含む霊的救いである。
 - ⑥この質問の前提自体が間違っている。
*わざによる救いが想定されている。

2. 26 節

Luk 10:26 イエスは彼に言われた。「律法には何と書いてありますか。あなたはどうか読んでいますか。」

- (1) イエスは、権威があると両者が認めている律法に関心を向けさせた。
 - ①律法とは、モーセの律法のことである。
 - ②律法を知り、それを正しく解釈することは、律法学者の仕事である。
- (2) この質問によって、イエスと律法学者の立場が逆転した。
 - ①イエスが律法学者を試す立場に立った。

3. 27～28 節

Luk 10:27 すると彼は答えた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』、また『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』とあります。」

Luk 10:28 イエスは言われた。「あなたの答えは正しい。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」

- (1) 律法学者は、正しく答えた。

①申 11 : 13

Deu 11:13 もしわたしが今日あなたがたに命じる命令、すなわち、あなたがたの神、【主】を愛し、心を尽くし、いのちを尽くして仕えよという命令に、あなたがたが確かに聞き従うなら、

②レビ 19 : 18

Lev 19:18 あなたは復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは【主】である。

(2) イエスは、律法学者の答えが正しいことを認めた。

①その答えには、一つ問題があった。

*律法を完ぺきに守った人は一人もいないという問題である。

②イエスは「それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます」と付け加えた。

*これは、わざによる救いを教えたものではない。

*むしろ、わざによる救いが不可能であることを教えたものである。

*一点でも失敗すれば、律法全体に違反したことになる。

*また、継続して律法を守り続けることは不可能である。

4. 29 節

Luk 10:29 しかし彼は、自分が正しいことを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とはだれですか。」

(1) 律法学者が示すべき反応とは何か。

①自分の無力を認める。

②何をすべきかをイエスに尋ねる。

(2) しかし彼は、自分を正当化しようとして、律法の命令を狭めようとした。

①隣人とは、近くにいる人たちである。

②しかし彼は、隣人の範囲を限定しようとした。

③ユダヤ人たちは、隣人の定義を狭くしていた。

*隣人とは、同胞のユダヤ人や、同じ宗教共同体に属する者である。

*異邦人、特にサマリア人は排除される。

④隣人の聖書的定義を採用すれば、今日の人種問題はただちに解決される。

(3) イエスは、誤解を正すために、良きサマリア人のたとえを語られた。

①良きサマリア人のたとえは、隣人愛について教えている。

②次に続くマルタとマリアのエピソードは、神への愛を教えている。

II. 良きサマリア人のたとえ (30～37 節)

1. 30 節

Luk 10:30 イエスは答えられた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下って行っただが、強盗に襲われた。強盗たちはその人の着ている物をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。

(1) 実話か創作した話かは、分らない。

①たとえ話は、実際に起こり得る内容を取り上げ、霊的教訓を教えるものである。

(2) 「ある人」の人種は、ユダヤ人であることが想定されている。

①エルサレムからエリコまでは、30 km 弱の下り道である。

②その間、約 1,000m 下る。

③曲がりくねった道で、強盗たちが出没する危険地帯となっていた。

④当時は、着物は高価な品であったので、はぎ取られた。

⑤旅人は抵抗したと思われる。半殺しになったまま放置された。

2. 31 節

Luk 10:31 たまたま祭司が一人、その道を下って来たが、彼を見ると反対側を通り過ぎて行った。

(1) そこに偶然、一人の祭司がやって来た。

①恐らくエリコの住民であろう。エリコは、祭司とレビ人の町と言われていた。

②彼は、エルサレムでの奉仕を終えたばかりである。

③彼は、瀕死の人を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

④ルカは、その理由を書いていない。

⑤いずれにしても、この祭司は、隣人愛の実践に失敗した。

3. 32 節

Luk 10:32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

(1) 次に、レビ人が通りかかった。

①レビ人は、祭司を援助する役割を担っていた。

②彼も、祭司と同じように行動した。

③ルカは、その理由を書いていないが、想像はできる。

＊強盗が近くにいるかもしれないという恐れ

＊儀式的な汚れを受けるかもしれないという恐れ

＊面倒なことに巻き込まれるかもしれないという恐れ

4. 33～35 節

Luk 10:33 ところが、旅をしていた一人のサマリア人は、その人のところに来ると、見てかわいそうに思った。

Luk 10:34 そして近寄って、傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで包帯をし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行って介抱した。

Luk 10:35 次の日、彼はデナリ二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』

(1) サマリア人は、3 人の中で最も援助の手を差し伸べる可能性が低い人である。

- ①にもかかわらず、彼は傷ついた旅人を助けた。
- ②「サマリア人」ということばが、文頭に置かれている。
- ③「選りに選ってサマリア人が」というニュアンスがある。

(2) 「かわいそうに思った」

- ①あわれみの心が、人種的偏見に打ち勝った。
- ②サマリア人のあわれみの心が、祭司とレビ人の同胞愛の欠如と対比されている。
- ③医者ルカの記述
 - *オリーブ油は、痛みを和らげた。
 - *ぶどう酒は、傷口を消毒した。
 - *包帯をした。

(3) サマリア人は、愛を実行した。

- ①傷ついた旅人をロバに乗せて宿屋に連れて行った。
 - *ベタニヤとエリコの間に、2 つの宿屋の遺跡がある。
- ②そこで一泊し、翌日、宿の主人にデナリ 2 枚を支払って、看護を依頼した。
- ③デナリ 2 枚は、たいそうな額である。
 - *当時は、一日の生活費は 12 分の 1 デナリとされていた。
- ④もっと費用がかかったら、その分も支払うことを約束した。

5. 36 節

Luk 10:36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか。」

(1) これが、このたとえ話の適用である。

- ①イエスは、「では、私の隣人とはだれですか」という問いをさかさまにした。
- ②「誰が強盗に襲われた人の隣人になったか」と問われた。
- ③答えは単純明快である。

6. 37 節

Luk 10:37 彼は言った。「その人にあわれみ深い行いをした人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って、同じようにしなさい。」

(1) 律法学者は、正しく回答した。

①しかし彼は、「サマリア人」ということばを口にすることを拒否した。

(2) イエスは、サマリア人のように行動しなさいと命じた。

①ことばで信仰を告白するだけでは不十分である。

②行動したときに、隣人愛を実践したことになる。

③この命令自体が、100%実行することは不可能である。

④この律法学者がどう応答したかは、書かれていない。

結論

1. 行いのない信仰

(1) 祭司

①人を助けるのが仕事である。

②日々聖書に親しみ、律法の要求を良く理解している。

③先ほどまで、礼拝と霊的体験の中心であるエルサレムにいた。

④彼の信仰は、行動につながらなかった。

(2) レビ人

①祭司を援助するのが仕事である。

②彼の信仰もまた、行動につながらなかった。

(3) ヤコ 2:14

Jas 2:14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがないなら、何の役に立つでしょうか。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

2. 隣人愛の実践

(1) イエスとサマリア人の対比は、鮮明である。

①しかし、これはこのたとえ話の中心ではない。

②イエスは、隣人愛とはどのようなものであるかを教えた。

(2) 愛は感情ではなく、行動である。

①予定を変更する。

②お金を使う。

③評判を危険にさらす。

④これらのことを見知らぬ人のためにする（人間だという理由だけで）。

3. 「良きサマリア人のたとえ」が持つエネルギー

(1) 良きサマリア人病院 (Good Samaritan Hospital)

(2) サマリタンズ・パース

①1970 年、アメリカでボブ・ピアスによって設立された緊急援助支援団体。

②1979 年、フランクリン・グラハムが代表者に就任。

③日本では、東日本大震災直後から活動が始まった。

(3) 「あわれみの心」

①人種の壁、階級間の争い、偏見などを乗り越える力である。

ルカの福音書 53 回

マルタとマリア

ルカ 10 : 38～42

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスのガリラヤ地方での奉仕（ルカ 4 : 14～9 : 50）

②ルカ 9 : 51 からエルサレムへの旅が始まった（ルカ 9 : 51～19 : 27）。

＊ルカは、弟子たちに語られたイエスの教えに関心がある。

＊エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

(2) 直近の文脈

①派遣された 70 人が帰還した。

②イエスは、弟子としていかに生きるべきかを語った。

(3) ルカ 10 : 25～11 : 13 は、1 つのブロックである（ルカだけの情報）。

①隣人との関係－良きサマリア人のたとえ（10 : 25～37）

②イエスとの関係－マルタとマリア（10 : 38～42）

③父なる神との関係－主の祈り（11 : 1～13）

(4) 注目すべき点

①ルカは、ここでも、弟子となった婦人たちを取り上げている。

＊ルカ 8 : 2～3

Luk 8:2 また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、

Luk 8:3 ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。

②良きサマリア人のたとえは、隣人への愛（第 2 の命令）がテーマである。

③マルタとマリアの話は、神への愛（第 1 の命令）がテーマである。

2. アウトライン

(1) イエスを歓迎する家（38 節）

(2) マリアの応対（39 節）

(3) マルタの応対（40 節）

(4) イエスの教え（41～42 節）

3. 結論：イエスの弟子として学ぶべき霊的教訓

弟子としての生活の優先順位について学ぶ。

I. イエスを歓迎する家（38 節）

1. 38 節

Luk 10:38 さて、一行が進んで行くうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタという女の人がイエスを家に迎え入れた。

(1) エルサレムへの旅というモチーフが続く。

- ①ルカは、旅の行程や地理的情報は重視していない。
- ②急にエルサレムに近づいているが、ルカの意図からすれば、問題ではない。
- ③これは、最後の過越の祭りの前の 12 月（ハヌカの祭り）のことだと思われる。

(2) 「ある村」とは、ベタニアであるが、ルカはそれを省略している。

①ヨハ 11:1

Joh 11:1 さて、ある人が病気にかかっていた。ベタニアのラザロである。ベタニアはマリアとその姉妹マルタの村であった。

②ヨハネは、ラザロの名を挙げているが、ルカ（共観福音書）は省略している。

③両者の違いは何か。

*ラザロの一家は、ユダヤ人からの攻撃に遭う可能性があった。

*ルカはそれを恐れて、ベタニアの名もラザロの名も伏せたと考えられる。

*ヨハネの福音書はエルサレム崩壊以降に書かれたので、なんの問題もない。

(3) ルカは、マルタをこの家の女主人として紹介している。

①マルタはアラム語の「マル」から派生している。女主人という意味である。

②彼女の歓迎ぶりは、サマリア人の否定的な態度と好対照を成している。

③ルカ 9:53

Luk 9:53 しかし、イエスが御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので、サマリア人はイエスを受け入れなかった。

④マルタは責任感の強い女主人である。

⑤イエスの弟子として、最大限のもてなしをしようとした。

II. マリアの応対（39 節）

1. 39 節

Luk 10:39 彼女にはマリアという姉妹がいたが、主の足もとに座って、主のことばに聞き入

っていた。

- (1) マルタにはマリアという妹がいた。
 - ①マリアは、ミリアムである。
 - ②彼女は、姉のマルタとは異なった対応をした。
- (2) マリアは、伝統的な弟子の姿勢を取った。
 - ①主の足もとに座って、そのことばに聞き入った。
 - ②ラビの足もとに座るのは、弟子が学ぶときの姿勢である。
 - ③使 22 : 3

Act 22:3 「私は、キリキアのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。

＊「ガマリエルのもとで」は、「at the feet of Gamaliel」である。

- ④「主」ということばは、イエスの権威を表している。
- ⑤マリアは、弟子としてイエスの権威に服したのである。

Ⅲ. マルタの応対 (40 節)

1. 40 節 a

Luk 10:40a ところが、マルタはいろいろなもてなしのために心が落ち着かず、

- (1) マルタも、マリアと同じようにイエスの足もとに座りたかったはずである。
 - ①しかし、女主人としての役割があったので、それができなかった。
 - ②彼女は、心が落ち着かなかった。
 - ＊心を乱した。
 - ＊イエスに向けるべき関心が、あちこち揺れ動いた。
 - ③マリアに対する妬みも生まれてきた。

2. 40 節 b

Luk 10:40b みもとに来て言った。「主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。」

- (1) マルタは、文句を言うためにイエスのもとに来た。
 - ①彼女は、イエスがマリアに忠告してくれることを願った。
 - ②「座り込んでいないで、お姉さんの手伝いをしなさい」と言ってほしかった。
- (2) 「主よ」と言っているが、イエスを自分の計画どおりに動かそうとしている。
 - ①彼女は、マリアがしているように、主イエスの計画に耳を傾けるべきであった。

IV. イエスの教え (41～42 節)

1. 41 節

Luk 10:41 主は答えられた。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。

(1) イエスはマルタを否定したのではなく、思い煩いの解決策を与えようとした。

①「マルタ、マルタ」という呼びかけに、愛とあわれみが込められている。

②ルカ 22 : 31

Luk 22:31 シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。

③使 9 : 4

Act 9:4 彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」

(2) イエスは、問題の分析をした。

①いろいろな思い煩いとは、過剰な接待のことである。

②これはイエスが命じたことではなく、彼女自身が、自らに課したことである。

③もてなしは簡素にして、主イエスのことばに耳を傾けるほうがよほど良い。

(ILL) 将来の方法性について相談に乗ってくれたある牧師（食事もしないで）

2. 42 節

Luk 10:42 しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」

(1) 必要なことは一つだけです。

①必要なこととは、イエスのことばに耳を傾けることである。

②これは、主の権威を認めることであり、主に依存することでもある。

③イエスのことばを聞くとは、イエスの弟子になることである。

(2) マリアの選んだ一つのことは、マルタの選んだ多くのことよりもまさっている。

①マルタは、働きを少なくし、もっとイエスのことばを聞くべきであった。

②マリアが選んだのは弟子としての道であり、そこには祝福が伴っている。

③それが彼女から取り上げられることはない。

結論：イエスの弟子として学ぶべき霊的教訓

1. 「わざによる救い」や「律法主義的生活」を求めるのは、危険なことである。

- (1) 良きサマリア人のたとえの直後に、このエピソードが置かれている。
- (2) ルカは、行い以上にイエスのことばに耳を傾けることの重要性を説いた。

2. 静思の時間を確保しないで、忙しく奉仕をすることは無意味なことである。

- (1) 神は、私たちが聞き従うことを望んでおられる。
- (2) 神のことばを聞かなければ、祝された奉仕はできない。
- (3) 弟子として、優先順位を確立する必要がある。

3. 相手の必要を確認しないで、自分の判断で親切にしようとするのは愚かなことである。

- (1) マルタは、食卓にごちそうを並べることが、親切だと思い込んでいた。
- (2) イエスは、食事は簡単にして、自分のことばに耳を傾けてほしいと思われた。
- (3) 自分の奉仕が、神の御心に適っているかどうか、吟味しよう。

4. イエスのことばを聞いて理解する人は、時宜に適った奉仕をすることができる。

- (1) ヨハ 12 : 2～3

Joh 12:2 人々はイエスのために、そこに夕食を用意した。マルタは給仕し、ラザロは、イエスとともに食卓に着いていた人たちの中にいた。

Joh 12:3 一方マリアは、純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ取って、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。

- (2) ヨハ 12 : 7

Joh 12:7 イエスは言われた。「そのままさせておきなさい。マリアは、わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのです。」

ルカの福音書 54 回

主の祈り

ルカ 11 : 1～4

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスのガリラヤ地方での奉仕（ルカ 4 : 14～9 : 50）

②ルカ 9 : 51 からエルサレムへの旅が始まった（ルカ 9 : 51～19 : 27）。

*エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

(2) 直近の文脈

①派遣された 70 人が帰還した。

②イエスは、弟子としていかに生きるべきかを教えた。

(3) ルカ 10 : 25～11 : 13 は、1 つのブロックである（ルカだけの情報）。

①隣人との関係ー良きサマリア人のたとえ（10 : 25～37）

②イエスとの関係ーマルタとマリア（10 : 38～42）

③父なる神との関係ー主の祈り（11 : 1～13）

*①は隣人愛に関する教えである。

*②と③は神への愛に関する教えである。

(4) 注目すべき点

①この箇所では、ルカは祈りというテーマに焦点を合わせている。

②マタイの福音書の「主の祈り」とルカの福音書のそれは、相当違っている。

③イエスは、祈りの重要性を何度も教えたのであろう。

2. アウトライン

(1) 状況説明（1 節）

(2) 第 1 区分（2 節）

(3) 第 2 区分（3～4 節）

3. 結論：主の祈りのまとめ

主の祈りについて学ぶ。

I. 状況説明（1 節）

1. 1 節

Luk 11:1 さて、イエスはある場所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

(1) ルカがイエスの祈りに言及するのは、これで 5 回目である。

① 3 : 21、5 : 16、6 : 12、9 : 18

② イエスは、弟子たちに手本を示した。

(2) 弟子たちは、自分たちの祈りの生活が不十分であることを認識した。

① 弟子の一人が、イエスに祈りを教えてほしいと願った。

＊弟子の一人が願い、イエスがそれに答えているのは、ここだけである。

＊ルカは、祈りの重要性を伝えようとしている。

② 弟子の一人は、祈りに関する教理的教えを求めたのではない。

③ 彼は、具体的な祈りのことばを求めたのである。

④ イエスの弟子として、父なる神にどう祈れば良いのかを尋ねた。

(3) 他のユダヤ人のグループは、それぞれに独特の祈りのことばを持っていた。

① バプテスマのヨハネの弟子グループも、独特の祈りを献げていた。

② イエスの弟子たちの多くが、かつてはバプテスマのヨハネの弟子であった。

③ 彼らは、その時代のことを思い出したのであろう。

④ そこでイエスは、彼らに祈りのことばを教えた。

⑤ 第 1 区分には 2 つの祈り、第 2 区分には 3 つの祈りがある。

II. 第 1 区分 (2 節)

1. 2 節

Luk 11:2 そこでイエスは彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。／『父よ、御名が聖なるものとされますように。／御国が来ますように。』

(1) イエスの意図は、このことばどおりに、くり返し祈ることである。

① マタ 6 : 9

Mat 6:9 ですから、あなたがたはこう祈りなさい。／『天にいます私たちの父よ。／御名が聖なるものとされますように。』

② マタイでは、祈りの型が挙げられている。

③ ルカでは、祈りのことばが挙げられている。

(2) 「父よ」という呼びかけ

① まず、父なる神に関心を向ける。

- ②ギリシア語の「パテーラ」、アラム語の「アバ」。
 - ③これは、尊敬と親密さを表現する呼び名である。
 - ④イエスは、神に対して「父よ」と呼びかけておられた（10：21）。
 - ⑤弟子たちは、イエスとの関係のゆえに、「父よ」と呼びかけることができる。
 - ⑥イエスと父の関係は、弟子たちと父の関係と同じではない。
- (3) 祈りの内容は 2 つの部分に分かれる。
- ①第 1 の区分には、2 つの祈りが含まれる（被造世界に対する神の計画）。
 - ②第 2 の区分には、3 つの祈りが含まれる（弟子たちの必要）。
- (4) 第 1 区分の第 1 の祈り
- ①「御名が聖なるものとされますように」
 - *誰もが、あなたの御名を聖なるものと認めますように。
 - ②神の御名とは、神のご性質の総体である。
 - ③神の評判が、すべての人の間で良いものとなりますように。
 - ④これは、偉大な御業を行ってくださいという祈りである。
- (5) 第 1 区分の第 2 の祈り
- ①「御国が来ますように」
 - *御国が来たなら、神の御名は人々の間で聖なるものとされる。
 - ②普遍的神の国は、常に存在している。
 - ③御国とは、メシア的王国（千年王国）のことである。
 - *旧約聖書に預言されている地上の王国である。
 - ③御国はまだ来ていないので、今もこの祈りは有効である。

Ⅲ. 第 2 区分 (3～4 節)

1. 3 節

Luk 11:3 私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください。

(1) 第 2 区分の第 1 の祈り

- ①これは、弟子の必要が満たされるようにという祈りである。
- ②マタ 6：11 は、「今日」を強調している。

Mat 6:11 私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください。

- ②ルカ 11：3 では、「毎日」となっている。
- ③これは矛盾ではなく、補完的なものである。
- ④当時の人たちには、意味のある祈りであった。

⑤出 16 : 4

Exo 16:4 【主】はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたがたのために天からパンを降らせる。民は外に出て行って、毎日、その日の分を集めなければならない。これは、彼らがわたしのおしえに従って歩むかどうかを試みるためである。

⑥イエス時代の人たちは、日当によって生活するのが普通であった。

⑦現代人にとっては、自分が完全に神に依存していることを思い出す機会となる。

2. 4 節

Luk 11:4 私たちの罪をお赦してください。／私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。／私たちを試みにあわせないでください。』

(1) 第 2 区分の第 2 の祈り

①これは、神の赦しを求めるものである。

②ルカは、単純に「罪」（ハマルティア）ということばを用いている。

③マタイでは「負い目」（オフエイレマタ）ということばである（マタ 6 : 12）。

④イエスの弟子たちは、信仰と恵みによって罪が赦された。

⑤ここでの祈りは、父との関係を維持するためのものである。

⑥1 ヨハ 1 : 9

1Jn 1:9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。

⑦他人の罪を赦すことができる人は、神の赦しを体験している人である。

⑧他人の罪を赦せない人は、神の赦しの意味を理解していない人である。

(2) 第 2 区分の第 3 の祈り

①「私たちを試みにあわせないでください」

②これは、神の守りを求める祈りである。

③これは、神が私たちを誘惑すると教えているわけではない。

＊神は、私たちを訓練するために、私たちを試みに遭わせることがある。

④これは、自分の弱さを認め、神の助けを求める祈りである。

⑤これは、緩叙法という修辭的表現である。

＊否定的なことばを用いることによって、積極的な概念を表現している。

＊「良い」の代わりに「悪くない」というようなものである。

結論：主の祈りのまとめ

1. 祈りの土台

(1) 信者と父なる神の関係

①私たちは、キリストにあって父なる神を「父」と呼ぶことができる。

②キリストと父なる神の關係に似たものが、私たちに与えられている。

(2) 聖句

①ヨハ 20 : 17

Joh 20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないのです。わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」

②ロマ 8 : 14~17

Rom 8:14 神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです。

Rom 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。

Rom 8:16 御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証ししてください。

Rom 8:17 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。

③ガラ 4 : 6~7

Gal 4:6 そして、あなたがたが子であるので、神は「アバ、父よ」と叫ぶ御子の御霊を、私たちの心に遣わされました。

Gal 4:7 ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神による相続人です。

2. 第1の区分

(1) 第1の区分の2つの祈りは、極めてユダヤ的なものである。

(2) 「御名が聖なるものとされますように」

①これは、神の栄光が現れるようにという祈りである。

②聖書が書かれた目的は、神の栄光である。

(3) 「御国が来ますように」

①御国とは、メシア的王国（千年王国）のことである。

②御国とは、旧約聖書に預言されている地上の王国である。

③御国はまだ来ていないので、今もこの祈りは有効である。

3. 第2の区分

(1) 「私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください」

- ①これは、現在の必要を求める祈りである。
- ②私たちには、自分が完全に神に依存していることを思い出す機会となる。
- (2) 「私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します」
 - ①これは、過去の必要を求める祈りである。
 - ②私たちは、信仰と恵みによって罪が赦された。
 - ③父との関係を維持するために、信じてから犯した罪も赦される。
- (3) 「私たちを試みにあわせないでください」
 - ①これは、将来の守りを求める祈りである。
 - ②これは、自分の弱さを認め、神の助けを求める祈りである。

ルカの福音書 55 回
祈りの重要性を教える 2 つのたとえ話
ルカ 11 : 5～13

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカ 9 : 51 からエルサレムへの旅が始まった（ルカ 9 : 51～19 : 27）。
- ②ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

(2) 直近の文脈

- ①派遣された 70 人が帰還した。
- ②イエスは、弟子としていかに生きるべきかを語った。

(3) ルカ 10 : 25～11 : 13 は、1 つのブロックである（ルカだけの情報）。

- ①隣人との関係ー良きサマリア人のたとえ（10 : 25～37）
- ②イエスとの関係ーマルタとマリア（10 : 38～42）
- ③父なる神との関係ー主の祈り（11 : 1～13）
 - *主の祈り（1～4 節）
 - *真夜中にパンを借りる人（5～8 節）
 - *熱心に求める人（9～13 節）

(4) 注目すべき点

- ①2 つのたとえ話は、祈りの動機づけを与えるためのものである。
- ②最初のたとえ話は、神の性質と隣人の性質を対比させている。
- ③次のたとえ話は、天の父と肉の父親を対比させている。

2. アウトライン

- (1) 真夜中にパンを借りる人（5～8 節）
- (2) 熱心に求める人（9～13 節）

3. 結論

- (1) 祈りのことば
- (2) 天の父からの答え
- (3) 聞かれない祈りという問題

祈りの動機づけについて学ぶ。

I. 真夜中にパンを借りる人（5～8 節）

1. 5～6 節

Luk 11:5 また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうちのだれかに友だちがいて、その人のところに真夜中に行き、次のように言ったとします。『友よ、パンを三つ貸してくれないか。』

Luk 11:6 友人が旅の途中、私のところに來たのだが、出してやるものがないのだ。』

(1) 古代中近東では、旅人をもてなすことは聖なる務めであった。

①客が到着すると、通常主人は、泊まる場所と食事を提供した。

(2) 当時は、暑さを避けるために夜間に旅する人が多かった。

①この旅人も、夜間に移動し、予期せぬ時間帯にこの家に着いた。

②不都合な時間帯にその家に着いた理由は、説明されていない。

*その情報は、どうしても良いことである。

(3) この家の主人は、当惑した。

①彼の家には、客に出すパンがなかった。

②唯一の解決法は、友人からパンを借りることであった。

③彼は、真夜中に友人の家に行った。

④当時の家の戸は、日中は開けられたままであった。プライバシーがない。

⑤夜間になると戸を閉めた。「起こさないでください」というサインであった。

⑥閉じられた戸を叩くのは非常識なことであるが、これ以外に方法がなかった。

⑥主人は、恥を忍んで戸を叩いた。

2. 7 節

Luk 11:7 すると、その友だちは家の中からこう答えるでしょう。『面倒をかけないでほしい。もう戸を閉めてしまったし、子どもたちも私と一緒に床に入っている。起きて、何かをあげることはできない。』

(1) 当時のパレスチナの典型的な家は、ワンルームであった。

①同じ部屋に、家族全員が身を寄せ合って寝ていた。

②ときには、家畜もそばで寝ていた。

(2) この友だちが起き上がろうとしなかったのは、当然のことである。

①もう戸を閉めてしまった。「起こさないでください」というサインを出した。

②子どもたちも一緒に床に入っている。

③騒々しくしたなら、彼らを起こしてしまうことになる。

3. 8 節

Luk 11:8 あなたがたに言います。この人は、友だちだからというだけでは、起きて何かをあげることはしないでしょう。しかし、友だちのしつこさのゆえなら起き上がり、必要なものを何でもあげるでしょう。

(1) 友情だけでは、この人は動かない。

①恥を忍んで、しつこく頼んだことがこの友人を動かした。

②「しつこさ」はギリシア語で「アナイディア」である。

*これは、恥じ知らずのしつこさである。

(2) イエスは、神の姿勢とこの友人の姿勢を対比させている。

①友人は、しつこく頼まないと動かなかった。

②神は、私たちが助けを求めただけで答えてくださる。

③そのためには、謙遜になって神に祈る必要がある。

④多くの場合、私たちは自分で問題を解決しようとする。

⑤その場合は、神の助けを得ることができない。

II. 熱心に求める人 (9～13 節)

1. 9～10 節

Luk 11:9 ですから、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。

Luk 11:10 だれでも、求める者は手に入れ、探す者は見出し、たたく者には開かれます。

(1) イエスによる祈りの勧め

①真夜中の緊急時の祈りだけではだめである。

②日常的に祈る必要がある。

③求める、探す、たたく。

*動詞の時制は、現在形である（継続した動作）。

*答えがすぐに来なくても、諦めるな。

*これは、祈りへの励ましのことばである。

(2) イエスは、祈りが聞かれることを保証された。

①「だれでも」とは、祈り求める弟子たちのことである。

②これ以上確実な保証はない。

③弟子は、祈りを諦めてはならない。

2. 11～12 節

Luk 11:11 あなたがたの中で、子どもが魚を求めているのに、魚の代わりに蛇を与えるような父親がいるでしょうか。

Luk 11:12 卵を求めているのに、サソリを与えるような父親がいるでしょうか。

(1) 2 つの例は、父なる神は喜んで祈りに答えてくださるということを教えている。

①2 つの例は、虚偽であり、危険を伴うものである。

②ラビ的教授法：人間の父親でも……、ましてや天の父は……。

(2) 肉の父は、魚の代わりに蛇を与えるようなことはしない。

①魚と蛇は似ている。

②ガリラヤ湖には、ウミヘビが生息していた。

(3) 肉の父は、卵の代わりにサソリを与えるようなことはしない。

①サソリは卵の殻を破り、中身を食べる。

②その後、殻を住み家とする。

③白色のサソリが身を丸くすると、卵のように見える。

3. 13 節

Luk 11:13 ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

(1) イエスの教えのクライマックス

①罪人である肉の父親と天の父の対比

(2) 罪人である肉の父親

①自分の子どもには良いものを与える。

(3) 完ぺきな天の父

①天の父は、弟子に必要なものをご存じである。

②天の父は、聖霊という最高のものを与えてくださる。

③この約束は、使 2：1～4 で成就した。

④今は、すべての信者の内に聖霊が住んでおられる。

⑤私たちは、聖霊をくださいと祈る必要はない。

⑥聖霊に満たしてくださいと祈る必要がある。

＊聖霊の満たしとは、聖霊の支配のことである。

⑦ロマ 8：9

Rom 8:9 しかし、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉のうちにではなく、御霊のうちにいます。もし、キリストの御霊を持っていない人がいれば、その人はキリストのものではありません。

結論

1. 祈りのことば

- (1) ルカによる「主の祈り」は、祈りのことばを教えたものである。
- (2) 祈りの土台は、神との親子関係である。
- (3) イエス・キリストにあって、私たちは神の子とされた。
- (4) 祈りは、神の子の特権である。

2. 天の父からの答え

- (1) 天の父は、私たちが祈るのを待っておられる。
- (2) 天の父は、喜んで祈りの答えを与えてくださる。
- (3) 天の父は、偽物ではなく、本物しか与えない。

3. 聞かれない祈りという問題

- (1) 聞かれない祈りというものは、現実には存在しない。
- (2) 祈ったとおりにならないのは、求めるものが最善ではないからである。
- (3) 願ったものが与えられるという約束は、そういう意味で理解する必要がある。

ルカの福音書 56 回

ベルゼブル論争

ルカ 11 : 14～26

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカ 9 : 51 からエルサレムへの旅が始まった（ルカ 9 : 51～19 : 27）。
- ②ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

(2) 直近の文脈

- ①派遣された 70 人が帰還した。
- ②イエスは、弟子としていかに生きるべきかを語った。
- ③今後の展開
 - *イエスとイエスのメッセージに対する拒否がクライマックスを迎える。
 - *拒否という現実の中で、弟子としていかに生きるべきかが教えられる。

(3) ルカ 11 : 14～54 の内容

- ①ベルゼブル論争（14～26 節）
- ②神のことばを守ることの重要性（27～28 節）
- ③ヨナのしるし（29～32 節）
- ④光に応答することの重要性（33～36 節）
- ⑤パリサイ人たちの敵意（37～54 節）

2. アウトライン

- (1) イエスによる悪霊の追い出し（14 節）
- (2) 群衆の否定的な反応（15～16 節）
- (3) イエスの反論（17～23 節）
- (4) 掃除された家（24～26 節）

3. 結論

- (1) 悪魔の国の存在
- (2) 掃除された家
- (3) 私たちへの適用

ベルゼブル論争について学ぶ。

I. イエスによる悪霊の追い出し（14 節）

1. 14 節

Luk 11:14 さて、イエスは悪霊を追い出しておられた。それは口をきけなくする悪霊であった。悪霊が出て行くと、口がきけなかった人がものを言い始めたので、群衆は驚いた。

(1) マタ 12 : 22～37 とマコ 3 : 20～30 にベルゼブル論争の記事がある。

①マタイの記事では、イエスに敵対しているのはパリサイ人たちである。

②マルコの記事では、イエスに敵対しているのは律法学者たちである。

*マタイとマルコの記事では、イスラエルは国家的にイエスを拒否した。

*これによって、イスラエルは回帰不能点を超えた。

③ルカの記事では、イエスに敵対しているのは群衆である。

*これは、マタイとマルコの記事とは別の出来事である。

*これは、宗教的指導者の判断が民衆に広がっていることを示している。

(2) ベルゼブル論争が出てくる理由は、「聖霊」というテーマにある。

①ルカ 11 : 13

Luk 11:13 ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

②ルカは、イエスの公生涯における聖霊の働きを強調してきた。

③特に、悪霊の追い出しに関しては、聖霊の働きが顕著に現れる。

④パリサイ人たちはそれを否定し、サタンがイエスに力を与えているとした。

(3) ここでルカは、ベルゼブル論争の舞台設定をする。

①イエスは口をきけなくする悪霊を追い出しておられた。

②この種の悪霊の追い出しは、メシアだけができることである。

③それを見て、群衆は驚いた。

II. 群衆の否定的な反応（15～16 節）

1. 15 節

Luk 11:15 しかし、彼らのうちのある者たちは、「悪霊どものかしらベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ」と言った。

(1) ある者たちは、イエスはベルゼブルによってこれを行っていると言った。

①ベルゼブルとは、「悪霊どものかしら」、つまりサタンのことである。

②ベルゼブルは、「バアル・ゼブル」（バアルの王子）から派生したことば。

③バアルは、カナン人たちの主神である。

④パリサイ人たちの判断が、民衆レベルにまで浸透している。

2. 16 節

Luk 11:16 また、ほかの者たちはイエスを試みようとして、天からのしるしを要求した。

(1) ほかの者たちは、口をきけなくする悪霊の追い出しだけでは満足しなかった。

①彼らは、イエスのメシア性を証明するより強力なしるしを求めた。

②これは、イエスを試みるための要求である。

③これは、イエスを挑発するための要求である。

(2) パリサイ人たちの結論が民衆レベルにまで影響を与えているのが分かる。

①ルカ 7 : 29～30

Luk 7:29 ヨハネの教えを聞いた民はみな、取税人たちでさえ彼からバプテスマを受けて、神が正しいことを認めました。

Luk 7:30 ところが、パリサイ人たちや律法の専門家たちは、彼からバプテスマを受けず、自分たちに対する神のみこころを拒みました。

②初期の頃に民衆とパリサイ人たちの間にあった差異が、なくなってしまった。

Ⅲ. イエスの反論（17～23 節）

1. 17～18 節

Luk 11:17 しかし、イエスは彼らの心を見抜いて言われた。「どんな国でも内輪もめしたら荒れすたれ、家も内輪で争えば倒れます。

Luk 11:18 あなたがたは、わたしがベルゼブルによって悪霊どもを追い出していると言いますが、サタンが仲間割れしたのなら、どうしてサタンの国は立ち行くことができるでしょう。

(1) イエスは彼らの心を見抜かれた。

①彼らが「しるし」を求めたので、イエスは彼らの心の中を見抜くことができた。

②ルカは、イエスが人の心を見抜くお方であることを強調している。

③これ以降、イエスの論理を 6 つ紹介する。

(2) イエスの論理 (1)

①どの軍隊でも、将軍が自軍の兵士を攻撃することはない。

②もしそれを行ったなら、その軍隊は崩壊する。

③サタンの国もそれと同じで、もし仲間割れしたなら、立ち行くことはできない。

2. 19 節

Luk 11:19 もし、わたしがベルゼブルによって悪霊どもを追い出しているとしたら、あなたがたの子らが悪霊どもを追い出しているのは、だれによってなのですか。そういうわけで、あなたがたの子らがあなたがたをさばく者となります。

(1) イエスの論理 (2)

- ①もし悪霊追い出しがサタンの力によるなら、ユダヤ人の祈祷師はどうなるのか。
- ②ユダヤ人の中には、悪霊追い出しの祈祷師たちがいた。
- ③ユダヤ人の祈祷師の背後にサタンがいると言うなら、大変な反発を食うだろう。
- ④パリサイ人たちは、二重基準を採用していることになる。

*イエスの場合は、サタンの力を利用している。

*ユダヤ人の場合は、神の力を利用している。

3. 20 節

Luk 11:20 しかし、わたしが神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。

(1) イエスの論理 (3)

- ①イエスは、神の指によって悪霊どもを追い出している。
- ②出 8 : 19

Exo 8:19 呪法師たちはファラオに「これは神の指です」と言った。しかし、ファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。【主】が言われたとおりであった。

*彼らは、奇跡の再現が不可能になると、「神の指」ということばを使った。

- ③イエスは、モーセの奇跡の場合と同じ力が働いていると主張した。
- ④この奇跡は、イエスにあって神の国が到来したことを示している。
- ⑤イエスは、メシアであり、神の国の王である。

4. 21～22 節

Luk 11:21 強い者が十分に武装して自分の屋敷を守っているときは、その財産は無事です。

Luk 11:22 しかし、もっと強い人が襲って来て彼に打ち勝つと、彼が頼みにしていた武具を奪い、分捕り品を分けます。

(1) イエスの論理 (4)

- ①「強い者」とは、サタンのことである。
- ②「もっと強い人」とは、イエスのことである。
- ③サタンは武装して、自分の屋敷を守っているので、その財産は無事である。

*財産とは、サタンが支配している囚われ人たちである。

- ④イエスはサタンの武具（悪霊ども）を奪い、囚われ人たちを解放される。

*それが、悪霊の追い出しである。

5. 23 節

Luk 11:23 わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしとともに集めない者は散らしているのです。

(1) イエスの論理 (5)

①イエスに味方しない者は、イエスに敵対する者である。

②ここで農業における収穫と、牧畜における家畜集めのたとえが採用される。

*イエスとともに集めない者は、散らしているのである。

③イエスに付くか、イエスに敵対するかのいずれかであって、中立はあり得ない。

IV. 掃除された家 (24～26 節)

1. 24～26 節

Luk 11:24 汚れた霊は人から出て行くと、水のない地をさまよって休み場を探します。でも見つからず、『出て来た自分の家に帰ろう』と言います。

Luk 11:25 帰って見ると、家は掃除されてきちんと片付いています。

Luk 11:26 そこで出かけて行って、自分よりも悪い、七つのほかの霊を連れて来て、入り込んでそこに住みつきます。そうすると、その人の最後の状態は、初めよりも悪くなるのです。」

(1) イエスの論理 (6)

①これは、イエスとともに集めない群衆への警告である。

②これは、イエスの議論のクライマックスである。

③悪霊を追い出しても、空白を別のもので埋めないと、より危険な状態に陥る。

④出て行った悪霊は、掃除された家に 7 つのほかの霊を連れて戻って来る。

⑤悪霊の追い出しを受けても、イエスを信じないなら、より危険な状態に陥る。

結論

1. 悪魔の国の存在

(1) イエスは、悪魔や悪魔の国を現実に存在するものと見なされた。

(2) 聖書は、「神の国と悪魔の国の葛藤」という視点で読み解くことができる。

(3) エペ 2 : 1～3

Eph 2:1 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、

Eph 2:2 かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。

Eph 2:3 私たちもみな、不従順の子らの中にあって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子

らでした。

(4) 私たちは、恵みと信仰によって救われた。

(5) 私たちは、神の国の市民とされた。

(6) エペ 6 : 10~12

Eph 6:10 終わりに言います。主にあつて、その大能の力によって強められなさい。

Eph 6:11 悪魔の策略に対して堅く立つことができるように、神のすべての武具を身に着けなさい。

Eph 6:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。

2. 掃除された家

(1) このたとえば、イスラエルの民に適用されるものである。

(2) 捕囚期前の時代、イスラエルの民は偶像礼拝という悪霊の支配下にあった。

(3) 捕囚は、その悪霊をイスラエルの民から追い出した。

(4) 捕囚期後の時代、イスラエルの民は偶像礼拝から解放された。

(5) 家は綺麗になったが、彼らはその家にイエスを迎えようとしなかった。

(6) イスラエルの民の将来は、より悲惨なものとなる。

(7) 患難期において、彼らは反キリストを神として受け入れるようになる。

(8) ヨハ 5 : 43

Joh 5:43 わたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。

3. 私たちへの適用

(1) 善人になる (reformation) だけでは、不十分である。

(2) 人生の変革 (transformation) が必要である。

ルカの福音書 57 回

ヨナのにしるし

ルカ 11 : 27～36

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカ 9 : 51 からエルサレムへの旅が始まった（ルカ 9 : 51～19 : 27）。
- ②ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

(2) 直近の文脈

- ①派遣された 70 人が帰還した。
- ②イエスは、弟子としていかに生きるべきかを語った。
- ③今後の展開
 - *イエスとイエスのメッセージに対する拒否がクライマックスを迎える。
 - *拒否という現実の中で、弟子としていかに生きるべきかが教えられる。

(3) ルカ 11 : 14～54 の内容

- ①ベルゼブル論争（14～26 節）
- ②神のことばを守ることの重要性（27～28 節）
- ③ヨナのにしるし（29～32 節）
- ④光に応答することの重要性（33～36 節）
- ⑤パリサイ人たちの敵意（37～54 節）

2. アウトライン

- (1) 神のことばを守る（27～28 節）
- (2) ヨナのにしるし（29～32 節）
- (3) 光に応答する（33～36 節）

3. 結論：私たちへの教訓

イエスが語った 3 つの教えについて学ぶ。

I. 神のことばを守る（27～28 節）

1. 27～28 節

Luk 11:27 イエスがこれらのことを話しておられると、群衆の中から、ある女が声をあげてイエスに言った。「あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は幸いです。」

Luk 11:28 しかし、イエスは言われた。「幸いなのは、むしろ神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」

- (1) 群衆の中から、ある女が声をあげてイエスに言った。
 - ①「あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は幸いです」
 - ②彼女は、イエスのような息子を産んだマリアはなんと幸いであろうかと言った。
 - ③イエスはこの機会を捉えて、しるしを求める群衆に結論的な教えを与えた。
 - ④彼らは、イエスの教えに耳を傾け、それに従うべきであった。

- (2) イエスは、マリアを過小評価も過大評価もしていない。

- ①メシアの母となるのは、確かに特権である。
- ②ルカ 1 : 48

Luk 1:48 この卑しいはしために／目を留めてくださったからです。／ご覧ください。今から後、どの時代の人々も／私を幸いな者と呼ぶでしょう。

- ③しかし、マリア以上に幸いな人たちがいる。
- ④イエスから救いのことばを聞き、それを信じ、実行に移す人は、幸いである。
*「救いのことば」とはベルゼブル論争の中で語られた教えである。
- ⑤イエスの教えを聞いている人は、それを信じ、実行すべきだということ。

II. ヨナのしるし (29～32 節)

1. 29～30 節

Luk 11:29 さて、群衆の数が増えてくると、イエスは話し始められた。「この時代は悪い時代です。しるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし、ヨナのしるしは別です。」

Luk 11:30 ヨナがニネベの人々のために、しるしとなったように、人の子がこの時代のために、しるしとなるからです。

- (1) 「群衆の数が増えてくると」
 - ①ここでの教えは、ベルゼブル論争とつながっている。
 - ②イエスの教えは、しるしを求める群衆に向けられたものである。
- (2) 「この時代は悪い時代です」
 - ①「今の時代の者たちはよこしまだ」（新共同訳）
 - ②「悪い時代」とは、イエスと同時代のユダヤ人たちのことである。
 - ③彼らは、イエスがメシアであることを証明する外的「しるし」を求めた。
 - ④しかし、ヨナのしるし以外のしるしは与えられない。
 - ⑤ヨナは、3 日 3 晩大魚の腹の中にいて、そこから復活した。
*ユダヤ人たちはそれをよく知っていたので、イエスはそれには触れない。

⑥ヨナのしるしは、3 つある（時間順に）。

＊ラザロの蘇生（ヨハ 11 章）

＊イエスの復活

＊2 人の証人の復活（黙 11 章）

⑦これらのしるしは、イエスが神から派遣されたメシアであることを証明する。

(3) ヨナは、ニネベの人々のためにしるしとなった。

①彼は、迫り来る神の裁きと、悔い改めの必要性を説いて回った。

②ニネベの人々は、ヨナのことばを信じ、悔い改めた。

③ニネベの町は、一時的に破壊を免れた。

(4) 人の子は、この時代のためのしるしとなった。

①異邦人はヨナのことばを信じたが、ユダヤ人はイエスのことばを信じない。

＊人の子は、ヨナよりも上位におられる方である。

②それゆえ、イスラエルの上に降る神の裁きは確実なものとなる。

＊御国（メシア的王国）の成就が延期される。

＊エルサレムが崩壊する。

2. 31 節

Luk 11:31 南の女王が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし見なさい。ここにソロモンにまさるものがあります。

(1) 「南の女王」とは、シェバの女王である（1 列 10 : 1～13）。

①彼女は、ソロモンの知恵を聞くために遠方からやって来た。

②しかし、イエスと同時代のユダヤ人たちは、イエスの知恵に耳を貸さない。

③イエスは、ソロモンよりも偉大なお方である。

④シェバの女王の信仰は、ユダヤ人たちの信仰よりもすぐれている。

＊彼女は、外的しるしがなくても、ソロモンのことばを信じた。

3. 32 節

Luk 11:32 ニネベの人々が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし見なさい。ここにヨナにまさるものがあります。

(1) ニネベの人々とシェバの女王の共通点

①なんの奇跡も見ないのに、語られることばをそのまま信じた。

* ヨナのことばとソロモンについてのことばを、そのまま信じた。

(2) イエスはヨナやソロモンよりもすぐれたお方である。

①この時代のユダヤ人たちは、イエスを信じようとしなかった。

(3) ニネベの人々とシェバの女王は、この時代のユダヤ人たちを罪ありとする。

Ⅲ. 光に応答する (33～36 節)

1. 33 節

Luk 11:33 だれも、明かりをとめて、それを穴蔵の中や升の下に置く者はいません。燭台の上に置きます。入って来た人たちに、その光が見えるようにするためです。

(1) これは、「悪霊の追い出し」と「しるし」に関する議論の締めくくりである。

①無知という暗やみから抜け出し、イエスのことばに応答すべきである。

(2) イエスは、このたとえを好んで用いられた。

①マタ 5 : 15～16

Mat 5:15 また、明かりをとめて升の下に置いたりしません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいるすべての人を照らします。

Mat 5:16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。

②ルカの福音書では、イエスが闇を追い出す方（ランプ）として描かれている。

③イエスの奉仕は、暗やみの中にいる人たちに光を届けるものである。

2. 34～35 節

Luk 11:34 からだの明かりは目です。あなたの目が健やかなら全身も明るくなりますが、目が悪いと、からだも暗くなります。

Luk 11:35 ですから、自分のうちの光が闇にならないように気をつけなさい。

(1) イエスは、人間の目をランプにたとえた。

①光源という意味ではなく、光を取り入れる機関という意味である。

②イエスの教えを受け入れる人は、健やかな目を持った人である。

③その人は、霊的に光の中に置かれる。

④イエスの教えを受け入れない人は、霊的に闇の中にとどまる。

⑤イエスの教えにどのように応答するかで、その人の霊性が決まる。

3. 36 節

Luk 11:36 もし、あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら、明かりがその輝きであ
なたを照らすときのように、全身が光に満ちたものとなります。」

- (1) イエスは、積極的なことばでこの教えを締めくくる。
 - ①イエスのことばを受け入れるなら、全身が明るくなる。
 - ②全身とは、人格のことである。
 - ③その人の人格が、霊的な知恵に満ちたものとなる。

結論：私たちへの教訓

1. 神のことばを守る

- (1) ユダヤ人たちは、家族関係を重視した。
- (2) ユダヤ人たちは、自分たちがアブラハムの子孫であることを誇りとした。
 - ①人の価値は、誰が先祖であるかによって決まった。
 - ②婦人の価値は、生まれた子どもによって決まった。
- (3) イエスは、血縁関係よりも、神のことばを聞き、それに従うことを重視した。
- (4) ルカは、福音が人種の壁を乗り越えて伝わって行くことを記録した。
- (5) ここには、マリアを崇拜することへの警告が記されている。

2. ヨナのしるし

- (1) ヨナの物語を神話と考える人たちがいる。
- (2) しかしイエスは、ヨナをソロモンと同じように歴史上の人物とされた。
- (3) 信仰とは、証拠の上ではなく、神のことばの上に成り立つものである。
- (4) 神のことばを信じない人は、死者の復活を見ても信じないだろう。
- (5) 「信じれば見えるようになる」というのが、信者の体験である。

3. 光に応答する

- (1) ニネベの人々とシェバの女王は、わずかばかりの光に応答した。
- (2) イエスと同時代のユダヤ人たちは、大いなる光に応答しなかった。
- (3) 私たちには、イエスと同時代のユダヤ人たち以上に光が与えられている。
- (4) 復活の目撃者情報、聖霊の力、無数の聖書、2千年の教会史、インターネット
- (5) 光に応答しないなら、ニネベの人々とシェバの女王が私たちを裁くことになる。

ルカの福音書 58 回

パリサイ人たちの敵意

ルカ 11 : 37～54

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカ 9 : 51 からエルサレムへの旅が始まった（ルカ 9 : 51～19 : 27）。
- ②ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

(2) 直近の文脈

- ①派遣された 70 人が帰還した。
- ②イエスは、弟子としていかに生きるべきかを語った。
- ③今後の展開
 - *イエスとイエスのメッセージに対する拒否がクライマックスを迎える。
 - *拒否という現実の中で、弟子としていかに生きるべきかが教えられる。

(3) ルカ 11 : 14～54 の内容

- ①ベルゼブル論争（14～26 節）
- ②神のこゑを守ることの重要性（27～28 節）
- ③ヨナのしるし（29～32 節）
- ④光に応答することの重要性（33～36 節）
- ⑤パリサイ人たちの敵意（37～54 節）

(4) 注目すべき点

- ①イエスに対する敵対は、群衆からパリサイ人に移行する。
- ②イエスの教えも、警告から糾弾に移行する。
- ③ルカが記しているのは、マタ 23 : 1～36 とは異なった出来事であろう。
- ④ルカの福音書では、これはイエスがパリサイ人に語った最後の教えである。
- ⑤霊的リーダーの責任は大きい。

2. アウトライン

- (1) きよめに関するイエスの教え（37～41 節）
- (2) パリサイ人に向けられた 3 つのわざわい（42～44 節）
- (3) 律法の専門家に向けられた 3 つのわざわい（45～52 節）
- (4) イエスに対する敵意（53～54 節）

3. 結論：イエスがパリサイ人や律法学者を叱責された理由

イエスに対する敵意について学ぶ。

I. きよめに関するイエスの教え（37～41 節）

1. 37～38 節

Luk 11:37 イエスが話し終えられると、一人のパリサイ人が、自分の家で食事をしていただきたい、とお願いした。そこでイエスは家に入って、食卓に着かれた。

Luk 11:38 そのパリサイ人は、イエスが食事の前に、まずきよめの洗いをなさらないのを見て驚いた。

(1) 一人のパリサイ人がイエスを食事に招いた。

- ①パリサイ派はイエスに敵対していたが、その中には例外もあった。
- ②食卓は、ラビが参列者に律法について教える機会でもあった。

(2) イエスは、主人役であるパリサイ人を驚かせた。

- ①食事の前に、きよめの洗い（儀式的洗い）を実行しなかった。
- ②モーセの律法は、食前のきよめの洗いを命じていない。
- ③しかし、食前のきよめの洗いは、パリサイ派の伝統の一部になっていた。
- ④パリサイ人は、きよめの洗いを汚れの予防策と考えていた。

2. 39～40 節

Luk 11:39 すると、主は彼に言われた。「なるほど、あなたがたパリサイ人は、杯や皿の外側はきよめるが、その内側は強欲と邪悪で満ちています。

Luk 11:40 愚かな者たち。外側を造られた方は、内側も造られたのではありませんか。

(1) イエスは、律法の命令を越えてきよめを行うことについては、非難しなかった。

- ①イエスは、この機会を捉えて、儀式的きよめが内包している矛盾を指摘された。
- ②イエスは、パリサイ人の教えが偽善的であることを指摘された。
- ③結果的に、パリサイ人を怒らせることになる。
- ④イエスは、真理のために戦うことを躊躇しなかった。

(2) パリサイ人は、細かいことにこだわりながら、大きなことは無視していた。

- ①食器の外側をきよめても、御心を行ったことにはならない。
- ②外側のきよめよりも重要なことは、内側のきよめである。
- ③神は、外側も内側も造られた。

(ILL) 汚いことばは、歯磨きではなく、内面のきよめによって癒される。

(ILL) フルクテンバウム師は食前の祈りをしない。

3. 41 節

Luk 11:41 とにかく、内にあるものを施しに用いなさい。そうすれば、見よ、あなたがたにとって、すべてがきよいものとなります。

(1) 自分が大事にしているものを貧しい人たちに施すべきである。

①施しによって心が清くなるわけではない。

②施しは、その人の心が清くなっていることの証拠となる。

II. パリサイ人に向けられた3つのわざわい (42～44 節)

1. 42 節

Luk 11:42 だが、わざわいだ、パリサイ人。おまえたちはミント、うん香、あらゆる野菜の十分の一を納めているが、正義と神への愛をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけませんが、これこそしなければならないことだ。

(1) 第1のわざわい：大事なことをおろそかにするという問題

①パリサイ人たちは、家庭菜園の収穫にまでこだわっていた。

*イエスは、ミントとうん香を例に挙げている。

②そのくせ、正義も神への愛もおろそかにしていた。

*十分の一もおろそかにしてはならないが、正義や神への愛のほうが重要。

2. 43 節

Luk 11:43 わざわいだ、パリサイ人。おまえたちは会堂の上席や、広場であいさつされることが好きだ。

(1) 第2のわざわい：虚栄心という問題

①会堂の上席を好んだ。

*当時は、指導者たちが会堂で前の席に座った。

②広場であいさつされることを好んだ。

*公の場で、虚栄心が満たされた。

3. 44 節

Luk 11:44 わざわいだ。おまえたちは人目につかない墓のようで、人々は、その上を歩いても気がつかない。」

(1) 第3のわざわい：汚れを拡散しているという問題

①人目につかない墓は、汚れを拡散する。

*墓を白く塗るのは、それに触って汚れを受けないためである。

②それと同じように、パリサイ人の教えを受ける人は汚れる。

*人々は、パリサイ人たちの教えが汚れていることを知らない。

*パリサイ派の教えは、国全体を汚れたものとしていた。

Ⅲ. 律法の専門家に向けられた 3 つのわざわい (45～52 節)

1. 45～46 節

Luk 11:45 すると、律法の専門家の一人がイエスに言った。「先生。そのようなことを言われるなら、私たちまで侮辱することになります。」

Luk 11:46 しかし、イエスは言われた。「おまえたちもわざわいだ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本触れようとはしない。

(1) 律法の専門家とは、律法学者である。

①律法の専門家は、固有のグループを形成していた。

②律法の専門家の多くは、パリサイ派に属していた。

③律法の専門家とパリサイ人たちは、行動をともにすることが多かった。

(2) その場にいた律法の専門家の一人が、イエスに抗議した。

①「先生。そのようなことを言われるなら、私たちまで侮辱することになります」

②彼は、自分たちはパリサイ人ほど罪が重くないと主張した。

③イエスは、それを認めなかった。

(3) わざわい 1: 愛がないという問題

①律法の専門家たちは、律法の解釈に時間を費やした。

②パリサイ派は、その解釈の実行を推進する宗教団体である。

③律法の専門家たちは、厳密な律法解釈を通して民に重荷を負わせた。

④しかし、自分たちのためには「抜け道」を用意した。

⑤と同時に、自分たちは律法に従順であるかのように振る舞っていた。

⑥彼らには、民衆に対する愛がない。

⑦ミシュナ法は、律法に従うよりも、口伝律法に従うほうが重要だとした。

*律法は難解であるが、解釈された口伝律法は明快である。

*明快な口伝律法に違反することは、より重大な罪となる。

2. 47～48 節

Luk 11:47 わざわいだ。おまえたちは預言者たちの墓を建てているが、彼らを殺したのは、おまえたちの先祖だ。

Luk 11:48 こうして、おまえたちは先祖がしたことの証人となり、同意しているのだ。彼ら

が預言者たちを殺し、おまえたちが墓を建てているのだから。

(1) わざわい 2：預言者たちを迫害するという問題

- ①古くなった預言者たちの墓を新しく建てるのは、決して悪いことではない。
- ②しかしイエスは、この行為の中に彼らの欺瞞を見る。
- ③彼らは、墓を建てることで先祖たちの罪に荷担している。
*先祖たちの罪の償いをしている。
- ④彼らは、死んだ預言者たちを敬うが、生きている預言者たちを迫害する。
*バプテスマのヨハネとイエスのことである。

3. 49～51 節

Luk 11:49 だから、神の知恵もこう言ったのだ。『わたしは預言者たちや使徒たちを彼らに遣わすが、彼らは、そのうちのある者たちを殺し、ある者たちを迫害する。

Luk 11:50 それは、世界の基が据えられたときから流されてきた、すべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。

Luk 11:51 アベルの血から、祭壇と神の家の間で殺されたザカリヤの血に至るまで。』そうだ。わたしはおまえたちに言う。この時代はその責任を問われる。

(1) イエスは、神の知恵を引用する。

- ①神の知恵とは、旧約聖書のことばである。
- ②引用した内容は、特定の旧約聖書の箇所ではない。
- ③これは、預言者たちの運命に関する啓示を要約したものである。

(2) 要約した内容

- ①民は、神が遣わした預言者たちや使いの者たちを迫害してきた。
- ②神は、すべての預言者の血の責任をこの時代に問う。
- ③なぜなら、この時代は神の御子を拒否したからである。
- ④神の怒りが、この時代の上に注がれる。

*紀元 70 年のエルサレム崩壊とユダヤ人の世界離散の悲劇

- ⑤この時代は、アベルの血からザカリヤの血に至るまでの責任を負う。

*アベルは、最初の殉教者（創 4：8）

*ザカリヤは、旧約聖書で最後の殉教者（2 歴 24：21～22）

4. 52 節

Luk 11:52 わざわいだ、律法の専門家たち。おまえたちは知識の鍵を取り上げて、自分はいらず、入ろうとする人々を妨げたのだ。」

(1) わざわい 3：知識の鍵を取り上げているという問題

- ①「知識の鍵」とは、神のことばであり、イエスのことばでもある。
- ②「the key of the knowledge」である。
- ③「the keys of the kingdom」（御国の鍵 マタ 16：19）ではない。
- ④律法の専門家たちは、イエスの教えを拒否した。
- ⑤その結果、人々が霊的知識を得ることを妨げた。

(2) このわざわいが、6つのわざわいのクライマックスである。

- ①神のことばを伝える使命を与えられた者たちが、その使命を放棄したのである。

IV. イエスに対する敵意（53～54 節）

1. 53～54 節

Luk 11:53 イエスがそこを出て行かれると、律法学者たち、パリサイ人たちはイエスに対して激しい敵意を抱き、多くのことについてしつこく質問攻めを始めた。

Luk 11:54 彼らは、イエスの口から出ることに、言いがかりをつけようと狙っていたのである。

(1) 律法学者とパリサイ人のイエスに対する敵意は、激しく燃えた。

- ①彼らは、多くのことについてしつこく質問攻めを始めた。
- ②イエスの信頼性を貶めるための質問である。
- ③言いがかりをつけるための質問である。

(2) これは、ルカの福音書の中での「霊的指導者たちによるメシアの拒否」である。

- ①イスラエルが公にイエスがメシアであることを拒否したということである。
- ②マタイとマルコでは、それぞれ 12 章がそれに該当する。
- ③律法学者とパリサイ人の殺意は、激しさを増していく。

結論：イエスがパリサイ人や律法学者を叱責した理由

- 1. 彼らは、外側をきよめたが、内側はそのままにしておいた。
- 2. 彼らは、菜園の収穫の 10 分の 1 を献げたが、正義と神への愛はおろそかにした。
- 3. 彼らは、称賛されたり注目を浴びたりすることを好んだ。
- 4. 口伝律法という重荷を人々に負わせ、自分では手助けしなかった。
- 5. イエスが語る真理のことばを受け入れなかった。
- 6. 人々がイエスのことばを受け入れるのを妨げた。

ルカの福音書 59 回

恐れなき信仰告白

ルカ 12 : 1～12

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカ 9 : 51 からエルサレムへの旅が始まった（ルカ 9 : 51～19 : 27）。
- ②ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

(2) 今後の展開

- ①前回の箇所では、イエスに対する拒否がクライマックスを迎えた。
- ②拒否という現実がある中で、弟子としていかに生きるべきかが教えられる。
- ③クリスチャンは、霊的戦いに巻き込まれている。

(3) ルカ 12 : 1～13 : 17 の内容

- ①恐れなき信仰告白（12 : 1～12）
- ②永遠の視点（12 : 13～21）
- ③神の備え（12 : 22～34）
- ④人の子の来臨（12 : 35～48）
- ⑤苦難の日の予告（12 : 49～59）
- ⑥悔い改めの勧め（13 : 1～9）
- ⑦教えの正しさを証明するしるし（13 : 10～17）

(4) 注目すべき点

- ①7つのポイントは、拒否という現実の中でいかに生きるべきかを教える連続したメッセージである。
- ②教えの対象は、弟子たちから群衆に広がっていく。
- ③最後に出てくる病の癒しは、イエスの教えの信頼性を保証するしるしである。

2. アウトライン

- (1) パリサイ人のパン種（1～3 節）
- (2) 5羽の雀のたとえ（4～7 節）
- (3) 恐れなき信仰告白（8～12 節）

3. 結論

- (1) 偽善とは
- (2) 恐れなき信仰告白とは
- (3) 聖霊に逆らう罪とは

恐れなき信仰告白の重要性について学ぶ。

I. パリサイ人のパン種 (1～3 節)

1. 1 節

Luk 12:1 そうしているうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスはまず弟子たちに話し始められた。「パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。

- (1) イエスの教えは、第一義的には弟子たちに向けられたものである。
 - ①しかし、多数の群衆が集まって来て、イエスの教えに耳を傾けた。
 - * 「数えきれないほどの」とは、誇張法である。
- (2) イエスは、パリサイ人の偽善を取り上げ、偽善の危険性について警告を発する。
 - ①マタイの文脈では、この教えは 12 使徒派遣の前に語られたものである。
 - ②ルカの文脈では、この教えはエルサレムへの旅の途上で語られたものである。
 - ③イエスは、同じ教えをくり返されたということである。
 - ④教えの内容は、迫害の中での恐れなき信仰告白の重要性である。
- (3) 「パリサイ人のパン種」
 - ①パン種は、パンを焼く際に必要なものである。
 - ②比喩的に用いられた場合は、「悪影響を与えるもの」という意味になる。
 - ③パン種は、小さな塊が粉全体に影響を及ぼす。
 - ④パン種は、パリサイ人の誤った教えである（マタ 16 : 6、12、マコ 8 : 15）。
 - ⑤ルカの福音書では、パン種はパリサイ人の偽善である。
 - ⑥偽善とは、邪悪な内面を敬虔そうな行為によって隠すことである。

2. 2～3 節

Luk 12:2 おおわれているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずにすむものはありません。

Luk 12:3 ですから、あなたがたが暗闇で言ったことが、みな明るみで聞かれ、奥の部屋で耳にささやいたことが、屋上で言い広められるのです。

- (1) ここで、霊的真理が語られる。
 - ①偽善によって今は隠されていることは、やがて明らかにされる。

- ②人間の経験としては、必ずしもそうとは言えない。
- ③イエスは、全知全能の神がおられることを前提に、これを語っている。
- ④クリスチャンの希望は、神はすべてをご存じだという点にある。
- ⑤神の前に立ったとき、すべてのものが明るみに出される。

(2) 弟子たちへの励まし語られる。

- ①迫害のゆえに隠れて行方福音伝達が、公然とできるようになる。
- ②奥の部屋で耳にささやいたことが、屋上で言い広められる（比喩のことば）。
- ③このことは、聖霊降臨以降に成就する。
 - *ユダヤ人がイエスを拒否する。
 - *イエスが十字架で死に、復活し、昇天する。
 - *聖霊が降臨する。
 - *弟子たちによる福音伝達が始まる。

II. 5羽の雀のたとえ（4～7 節）

1. 4～5 節

Luk 12:4 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。

Luk 12:5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。

- (1) イエスは、弟子たちのことを「わたしの友」と呼ばれた。
 - ①イエスの友とは、試練の中でも恐れなく信仰を告白する者である。
 - ②その人は、肉体の死さえも恐れない。
 - ③イエスは、弟子たちを忠実な福音の使者と認めておられる。
 - ④共観福音書でイエスが弟子を「友」と呼ぶのはここだけ（ヨハ 15 : 13～15）。
 - ⑤友は、苦難をともにし、同じ目的のために労する。

(2) イエスの弟子は、迫害する者ではなく、神を恐れる。

- ①神を恐れるなら、人に対する恐れはなくなる。
- ②神は最後の裁きを行われるお方である。
- ③人間の迫害者は、からだを殺した後は、何もできなくなる。
- ④もし神を否むなら、信者は永遠の報賞を失うことになる。
- ⑤さらに不信者の場合は、ゲヘナに投げ込まれることになる。

*ルカの福音書でゲヘナへの言及があるのは、ここだけである。

＊ゲヘナは、永遠の苦しみ場所である。

2. 6～7 節

Luk 12:6 五羽の雀が、二アサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません。

Luk 12:7 それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があるのです。

(1) ここにあるのは、小から大への議論である。

①神は、雀のことを覚えておられる。

②雀は、5羽が2アサリオンで売られている。

＊雀は、貧者の安価な食べ物であった。

＊アサリオンは、ローマの貨幣の単位で、16分の1デナリに相当した。

＊2羽が1アサリオンで売られる場合もあった。

＊2羽が最小単位で、次が5羽であった。

③雀は人間よりもはるかに価値が低いものである。

④それなら、神が弟子たちのことを覚えておられるのは、当然である。

⑤弟子たちの神の毛さえ、すべて数えられている。

＊神の許しがなければ、神の毛1本地に落ちることはない。

(2) この議論は、迫害する者を恐れなくてもよい理由になっている。

①神の愛は、子どもを守る父親の愛である。

Ⅲ. 恐れなき信仰告白（8～12 節）

1. 8～9 節

Luk 12:8 あなたがたに言います。だれでも人々の前でわたしを認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。

Luk 12:9 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。

(1) 弟子たちにの前には、2つの道が置かれている。

①公に、イエスがメシアであることを認める（告白する）道

＊その人は、祝福を得る。

＊イエスは、天使たちの前でその人を認めてくださる。

②人々の前でイエスを拒否する道

＊その人は、不信仰の結果を刈り取る。

＊イエスは、天使たちの前でその人を拒否する。

(2) イエスによる裁きは、死後に行われる。

①信者にとっては、「キリストの御座の裁き」がそれである（1 コリ 3：10～15）。

②これは報賞のための裁きである。報賞が多いか少ないかは、これで決まる。

③弟子たちは、生涯を通して忠実に歩んだかどうかが判定される。

2. 10 節

Luk 12:10 人の子を悪く言う者はだれでも赦されます。しかし、聖霊を冒瀆する者は赦されません。

(1) 赦される罪

①イエスのメシア性を否定しても、後に悔い改めるなら赦される。

②パウロは、イエスを信じる信仰によって赦された。

(2) 赦されない罪

①聖霊を冒瀆する罪は、赦されない。

②これは、ベルゼブル論争でユダヤ人たちが犯した罪である。

③この罪は、ユダヤ人の歴史の分水嶺となった。

Luk 12:11 また、人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。

Luk 12:12 言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」

(1) イエスは、弟子たちの苦難を予見しておられる。

①彼らは、ユダヤ人の指導者や異邦人の権力者の前で、証言するようになる。

②そのことを今から心配する必要はない。

③言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださる。

(2) 聖霊の 2 面性

①聖霊に対する冒瀆は、赦されない。

②聖霊に信頼するなら、弁明のことばが与えられる。

*これは通常の説教のことではない。

*審問を受けた際に与えられる弁明のことばのことである。

結論

1. 偽善とは

(1) 内面と外面が一致しない見せかけの行為である。

- (2) 真理を知っていながら、行動に移さないことである。
- (3) 自己中心的な動機で生きることである。
- (4) 信仰を厳格な規則の体系に置き換えることである。

2. 恐れなき信仰告白とは

- (1) 弟子は、迫害に遭っても沈黙すべきではない。
- (2) 使徒の働きの中では、弟子たちの勇気ある証言が何度も出てくる。
- (3) 使 4：8～12

Act 4:8 そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。

Act 4:9 私たちが今日取り調べを受けているのが、一人の病人に対する良いわざと、その人が何によって癒やされたのかということのためなら、

Act 4:10 皆さんも、またイスラエルのすべての民も、知っていただきたい。この人が治ってあなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの名によることです。

Act 4:11 『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石、それが要の石となった』というのは、この方のことです。

Act 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

3. 聖霊に逆らう罪とは

- (1) イエスは、旧約聖書に預言されていたメシア的王国を提供しておられた。
- (2) 聖霊がイエスのメシア性を示した場合、それを否定するなら、赦しはない。
- (3) この罪は、個人的な罪ではなく、民族的（国家的）罪である。
- (4) この罪は、イエスと同時代のユダヤ人だけが犯すことのできる罪である。
- (5) その裁きは、紀元 70 年にやって来た。
- (6) 今でもユダヤ人たちは、その裁きの影響を受けている。
- (7) メシア的王国の成就是、先に延ばされた。
- (8) 聖書は、この罪以外ならどんな罪でも赦されると教えている。

ルカの福音書 60 回

永遠の視点

ルカ 12 : 13～21

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②パリサイ人や律法学者によるイエスの拒否が、決定的になった。
- ③拒否という現実がある中で、弟子としていかに生きるべきかが教えられる。
- ④クリスチャンは、霊的戦いに巻き込まれているのである。

(2) ルカ 12 : 1～13 : 17 の内容

- ①恐れなき信仰告白 (12 : 1～12)
- ②永遠の視点 (12 : 13～21)
- ③神の備え (12 : 22～34)
- ④人の子の来臨 (12 : 35～48)
- ⑤苦難の日の予告 (12 : 49～59)
- ⑥悔い改めの勧め (13 : 1～9)
- ⑦教えの正しさを証明するしるし (13 : 10～17)

(3) 注目すべき点

- ①7つのポイントは、拒否という現実の中でいかに生きるべきかを教える連続したメッセージである。
- ②教えの対象は、弟子たちから群衆に広がっていく。
- ③最後に出てくる病の癒しは、イエスの教えの信頼性を保証するしるしである。

2. アウトライン

- (1) 食欲に対する警告 (13～15 節)
- (2) 愚かな農夫のたとえ話 (16～21 節)

3. 結論

- (1) 3つの聖書箇所
- (2) バランスの取れた人生

永遠の視点を持つことの重要性について学ぶ。

I. 食欲に対する警告（13～15 節）

1. 13 節

Luk 12:13 群衆の中の一人がイエスに言った。「先生。遺産を私と分けるように、私の兄弟に言ってください。」

(1) この箇所も、弟子訓練のための教えである。

- ①イエスは、忠実にイエスに従うことの重要性を教えておられた。
- ②そこに声を挟む者が現れた。
- ③「群衆の中の一人」とあるが、恐らく弟子ではないと思われる。
- ④彼は、イエスが別のテーマに移ろうとしている隙を捉えて、質問を投げかけた。
- ⑤聖なる教えが続く中で、俗なる質問をするのは、彼が俗人だからである。
- ⑥イエスはこの機会を捉えて、食欲の危険性について教える。
- ⑦11：37 以降では、パリサイ人の行為を捉えて、偽善の危険性について教えた。
- ⑧イエスの弟子は、食欲という強敵と戦う必要がある。
- ⑨食欲が原因で、弟子道から離れて行く人が多くいる。

(2) この人は、兄弟（恐らく兄）と遺産に関して争っていた。

- ①律法によれば、長子は 2 倍の取り分を得た。
- ②申 21：17

Deu 21:17 嫌われている妻の子を長子として認め、自分の全財産の中から二倍の取り分を彼に与えなければならない。その子は父の力の初穂であるから、長子の権利は彼のものである。

- ③彼が不当な扱いを受けていたのか、取り分以上に欲しかったのかは分からない。
- ④彼は、イエスが争いの仲裁人になってくれることを期待した。
- ⑤彼は、兄もイエスを律法の教師として敬うだろうと考えた

2. 14 節

Luk 12:14 すると、イエスは彼に言われた。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停人に任命したのですか。」

(1) 口語訳の訳文

「人よ、だれがわたしをあなたがたの裁判人または分配人に立てたのか」

- ①「人よ」を「いったい」（新改訳 2017）と訳すのは、意識である。
- ②「人よ」は力強い呼びかけであるが、侮辱的意味はない。
- ③ルカ 22：58

Luk 22:58 しばらくして、ほかの男が彼を見て言った。「あなたも彼らの仲間だ。」しかし、ペテロは「いや、違う」と言った。

＊「人よ、然らず」（文語訳）

- (2) イエスは、質問を返すことで、彼にイエスとは誰かについて考えさせた。
 - ①ユダヤ教では、ラビたちがそのような紛争の仲介者となっていた。
 - ②この人は、イエスをユダヤ教のラビと同列に置いていた。
 - ③しかしイエスは、奇跡によってご自身がメシアであることを啓示しておられた。
 - ④イエスは、究極的な意味での裁判官であるが、この人にはそれが見えなかった。
- (3) イエスは、この争いに介入しようとはされなかった。
 - ①その代わりに、この人の根本的な問題を解決しようとされた。
 - ②根本的な問題とは、彼の心を支配していた物質主義である。
 - ③イエスが来られた目的は、人を神のもとに連れ戻すことであって、財を人にもたらすことではない。

3. 15 節

Luk 12:15 そして人々に言われた。「どんな食欲にも気をつけ、警戒しなさい。人があり余るほど持っていても、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」

- (1) 食欲の問題
 - ①いくら手に入れても、満足することがない。
 - ②物質を必要以上に評価する（これは偶像礼拝である）。
 - ③他者への配慮に欠ける。
 - ④人生で最も重要なものを犠牲にする。
- (2) 人生の質は、財産の多さに比例するものではない。
 - ①この人は、より多くのものを所有すれば、より幸せになると考えていた。
 - ②人生に意味を与えるのは、神である。
 - ③それゆえ、富ではなく、神を求めるべきである。

II. 愚かな農夫のたとえ話（16～21 節）

1. 16 節 a

Luk 12:16a それからイエスは人々にたとえを話された。

- (1) この真理を心に印象づけるために、イエスはたとえ話を語る。
 - ①対象は群衆である。
 - ②ヘブライ的教授法から学ぶことは多くある。
 - ③インフォーマルな場での教えには、力がある。

2. 16b～18 節

Luk 12:16b 「ある金持ちの畑が豊作であった。

Luk 12:17 彼は心の中で考えた。『どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。』

Luk 12:18 そして言った。『こうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。

- (1) 主人公は、金持ちの農夫である。
 - ①彼は知的な農夫であるが、愚か者である。
 - ②彼が不当に財を成したという印象はない。
 - ③長年の努力によって、金持ちになったのであろう。
 - ④イエスは、計画を立てること自体を問題視しているわけではない。
 - ⑤重要なことを考慮していないことが問題である。

(2) 彼が考えた計画

- ①畑が豊作になった。
- ②作物を貯蔵する場所がない。
- ③今の倉を建て替え、もっと大きなものにしよう。
- ④そして、穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。

3. 19 節

Luk 12:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。」』

- (1) 彼は、自分のたましいに語りかけた。
 - ①「たましい」とは、全存在を表現することばである。
 - ②「これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ」
 - ③彼は、人生の豊かさは富の量によって決まると考えていた。

(2) 彼が考えつかなかったこと

- ①彼の関心事は、地上のことだけである。
- ②彼には、霊的生活への関心がなかった。
- ③また、死後の生活への関心もなかった。
- ④それゆえ、彼は愚か者である。

4. 20 節

Luk 12:20 しかし、神は彼に言われた。『愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』

(1) この人の結論と神の結論が対比されている。

①神は彼を「愚か者」と呼ばれた。

＊旧約聖書では、神を無視したり、神に反抗したりする人は、愚か者である。

＊彼は神を無視したので、愚か者である。

②彼は、これから何年も生きるつもりでいた。

＊神はその夜、彼のいのちが取り去られると言われた。

③彼は何も持たないで死後の世界に入っていく。

＊彼が蓄えた物は、相続人に渡る。

⑥伝 6 : 2

Ecc 6:2 神が富と財と誉れを与え、望むもので何一つ欠けることがない人がある。しかし神は、この人がそれを楽しむことを許さず、見ず知らずの人がそれを楽しむようにされる。これは空しいこと、それは悪しき病だ。

(2) このたとえ話は、イエスに声をかけた人の心に響いたはずである。

①たとえ遺産を相続したとしても、すぐにいのちが取り去られる可能性がある。

5. 21 節

Luk 12:21 自分のために蓄えても、神に対して富まない者はこのとおりです。」

(1) たとえ話の適用

①地上での富と天上での富が対比されている。

②自分が富むことだけを考え、霊的なことを考慮しない人は、愚か者である。

③この教訓は、弟子たちと群衆に語られた。

④永遠の視点がない者は、愚か者である。

⑤永遠の視点がない者は、人生の優先順位が混乱している人である。

(2) 繁栄の神学は、物質的な豊かさを神からの恵みの指標と考える。

①苦難の意味を評価しないキリスト教は、聖書的キリスト教ではない。

結論

1. 3つの聖書箇所

(1) マタ 6 : 19～21

Mat 6:19 自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。

Mat 6:20 自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。

Mat 6:21 あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのです。

(2) 1 テモ 6 : 6～10

1Ti 6:6 しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそが、大きな利益を得る道です。

1Ti 6:7 私たちは、何もこの世に持って来なかったし、また、何かを持って出ることもできません。

1Ti 6:8 衣食があれば、それで満足すべきです。

1Ti 6:9 金持ちになりたがる人たちは、誘惑と罠と、また人を滅びと破滅に沈める、愚かで有害な多くの欲望に陥ります。

1Ti 6:10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました。

(3) ヤコ 1 : 9～10

Jas 1:9 身分の低い兄弟は、自分が高められることを誇りとしなさい。

Jas 1:10 富んでいる人は、自分が低くされることを誇りとしなさい。富んでいる人は草の花のように過ぎ去って行くのです。

2. バランスの取れた人生

(1) 地上生活のための計画

(2) 永遠の生活のための準備

(III) 池田さん

①1885～1924 年の間に、約 20 万人の日本人がハワイに、18 万人がアメリカ本土に集団移民した。

②彼らは 1 世と呼ばれる日系人である。

③池田さんは、私よりも 60 歳くらい年上の 1 世であった。

④彼は、綿畑に投資したが干ばつのために無一物になってしまった。

⑤その結果、クリスチャンになった。